



TITLE:

「驚異」の探究： ジャンバッティスタ・マリーノ『ガレリア』と蒐集( Abstract\_要旨 )

AUTHOR(S):

日塔, 理恵子

---

CITATION:

日塔, 理恵子. 「驚異」の探究： ジャンバッティスタ・マリーノ『ガレリア』と蒐集. 京都大学, 2015, 博士(人間・環境学)

ISSUE DATE:

2015-09-24

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k19329>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開; 許諾条件により要約は2016-07-22に公開

京都大学	博士（ 人間・環境学 ）	氏名	日塔理恵子
論文題目	「驚異」の探求：ジャンバッティスタ・マリーノ『ガレリア』と蒐集		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、バロック期のイタリアを代表する文学者で蒐集家でもあったジャンバッティスタ・マリーノ（1569-1625）の主著『ガレリア』を中心に提起し、マリーノにおける詩と絵画との関係、美術のパトロネージュとコレクションの特徴等の問題を考察するものであり、五つの章と序および結からなる。各章のタイトルは順に以下の通りである。</p> <p>1. 「驚異」をめぐる叙述——散文と詩、2. 社会の鑑としての肖像画、3. 新たな「カプリッチョ」観の創造へ、4. 『ガレリア』と蒐集——理想と現実のギャラリー、5. ナポリとローマにおける葬儀。</p> <p>序で問題提起をして論文全体の構成を述べた後、第1章ではまず、マリーノにおいて詩と美術とを結びつける最大の特徴が「驚異<sup>mera-viglie</sup>」の創造であるという点を確認したうえで、「詩は絵画のように<sup>ut pictura poesis</sup>」という古代以来の箴言が、マリーノによってどのように再解釈されているかが、その著『聖講和』や『ガレリア』の分析によってたどられる。詩人としてのマリーノは、あくまでも詩を絵画よりも優位に置いていたが、それにもかかわらず、感覚を刺激することによって、実際にはありえない物事を信じ込ませることのできる絵画の力を高く評価していた。「真<sup>vero</sup>」と「偽<sup>finto</sup>」の巧みな組み合わせから絵画の「本当らしさ<sup>verosimile</sup>」、さらには「驚異」が生まれてくるとみなされるのである。「驚異」は「真」を凌駕する。こうして「偽」としての絵画の美と雄弁が、「驚異」の創造にとって大きな意味を持っていたことが明らかにされていく。</p> <p>第2章では、マリーノが『ガレリア』のなかで詩に歌い、実際にコレクションもしていた肖像画をめぐる問題が取り上げられる（残念ながら肖像画そのものはほとんど消失してしまった）。「驚異」という観点からとりわけ注目されるのは、「残酷な肖像<sup>l' imagine crudele</sup>」や「滑稽な肖像<sup>ritratti bvrleschi</sup>」とマリーノ自身が呼んでいる肖像画の存在である。前者では、観るものを「色あせ」させるような、あまりにも美しい女性肖像画が「残酷」と形容される独特の逆説的レトリックが指摘される。後者では、矮人、道化師、庶子、大食漢、錬金術師、猫背の詩人、大鼻男、髭もじゃ男等々の「滑稽な」肖像画の数々が、名士たちの肖像画に混じって詩に歌われているところから、マリーノが社会的少数者や下層の人々のイメージのうちに「驚異」を見出していたことが指摘される。そこからはまた、マリーノがジョヴァンニ・デッラ・ポルタの観相学、さらにはカラッチ兄弟やベラスケス等の同時代の美術の動向にも敏感だったことがうかがえる。</p> <p>第3章では、しばしば「奇想」と訳され、十八世紀の芸術の理論と実作において重要</p>			

な役割を演じることになる「カプリッチョcapriccio」という概念が、マリーノの『ガレリア』において先取りされていたことが明らかにされる。とりわけ、断片的なもの、崩れつつあるもの、欠損のあるものや侵食されているものへの嗜好が顕著に見られることが、詩の分析から浮かび上がらされる。こうした特徴をマリーノ自身「カプリッチョ」と呼び、「驚異」のもとに下位概念として組み込んでいるのである。これは、廃墟を組み合わせた十八世紀の絵画ジャンル「奇想画（カプリッチョ）」の先鞭となるものでもある。

第4章では、こうしたマリーノの新しい詩学と美学の形成が、自身の絵画コレクションの活動と密接に連動していたことが論証されていく。同時代の多くの画家たちに神話や文学作品のテーマを提案して素描を発注していたことが、マリーノの書簡等の解読によって明らかになる。『ガレリア』には肖像画や「カプリッチョ」のほかにも、「寓意画Favole」や「歴史画Storie」が収められていたが、画家の選択や主題の着想において、マリーノ本人が積極的な役割を果たしていたのである。また『ガレリア』には、描かれることを想定していない架空の絵画についても詩にうたうという、ヴァーチャルなギャラリーとしての側面が見られるという興味深い特徴も指摘される。ここにもまた言葉とイメージのあいだを自在に横断するマリーノの独自性を見て取ることができる。

最後の第5章では、ナポリとローマで執り行われたマリーノの葬儀の様子が当時の一次資料を駆使して再構成される（そのなかには申請者自身が発掘したものも含まれる）。アカデミア・デリ・オツィオーズィ（無精者アカデミー）とアカデミア・デリ・ウモリスティ（諧謔者アカデミー）によってそれぞれ主催されたこれらの葬儀には、生前マリーノと交友のあった画家たち——カヴァリエル・ダルピーノ、オラツィオ・ボルジャンニ、ジョヴァンニ・ランフランコ等々——が肖像画や寓意画を提供したが、そのことはまた、芸術擁護者にして蒐集家でもあった詩人の活動を象徴し総括するものであると考えられるのだ。

以上のように本論文は、マリーノのテキストの詳細な分析を通じて、バロック期に特徴的な詩学と美学を鮮やかに浮かび上がらせるものである。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は主に以下の四つの点において高く評価される。まず第一に、バロック期を代表するイタリアの文学者ジャンバッティスタ・マリーノ (1569-1625) についての、わが国で最初の本格的な専門研究であるという点があげられる。マリーノは、当時イタリアのみならずフランスでも広く読まれ、「マリニズモmarinismo」と呼ばれる重要な文学潮流の生みの親とされるにもかかわらず、わが国では画家プッサンとの関係を除けば、ほとんど論じられることがなかった。本論文は不当に看過されてきたこの詩人にして美術愛好家を、主に詩と美術との関係、コレクションとパトロネージュの特徴という観点から実証的かつ詳細に検討したもので、わが国においては先例のないものである。

第二に、マリーノの代表的なテキストである『ガレリア』と『聖講和』を中心に分析することで、その芸術観を的確にあぶりだすことに成功している点があげられる。具体的には、「驚異meraviglie」、「滑稽burlesco」、「奇想capriccio」といった概念に結実しているものである。マリーノにとって「驚異」は、「真vero」や「本当らしさverosimile」の表現をはるかに凌駕するもので、さらに五感を豊かに刺激するという力を有する。申請者は、その点でマリーノが詩の優位を前提としつつも、絵画における「驚異」を高く評価していたことを的確に論じている。これは、「詩は絵画のようにut pictura poesis」という古代に起源をもつ箴言をあくまでも詩の問題として捉えてきたユマニズム的な伝統からは一線を画するものである。

さらに「滑稽」や「奇想」は、「驚異」の下位概念として捉えられる。たとえば「滑稽」をめぐって申請者は、マリーノが所有したとされ『ガレリア』のなかで詩にもうたっている、社会的少数者や下層の人々——矮人、道化師、庶子、大食漢、錬金術師、猫背の詩人、大鼻男、髭もじゃ男等々——の肖像画の数々に注目する。それら特異な被造物たちは、自然と神の「驚異」としての側面をもち、博物学的、観相学的関心の対象でもあった。一方、「奇想」について申請者は、とりわけ断片的なもの、崩れつつあるもの、欠損のあるものや侵食されているものへの嗜好がマリーノに顕著に見られることを、詩の分析から浮かび上がらせる。こうした特徴をマリーノ自身「カプリッチョ」と呼び、「驚異」のもとに組み込んでいるのである。こうした美的趣味が、廃墟を組み合わせた十八世紀の絵画ジャンル「奇想画 (カプリッチョ)」を早くも先取りしていることを、申請者は詩の分析を通じて具体的かつ詳細に跡付けている。この指摘はきわめて独創的なものである。

第三に評価されるのは、コレクターとして、美術愛好家としてのマリーノの側面を明らかにした点である。この点はこれまでもイタリアやフランス語圏の研究において注目されてきたものだが、申請者が特に強調するのは、画家にたいして積極的に素描のテーマを助言し、「創意invenzione」や「想像fantasia」を働かせるようにと鼓舞していることである。そのなかには、たとえばルドヴィコ・カラッチ宛の書簡が示すように、「サルマキスとヘルマフロディトスのような淫らな空想に才能をつかうか

らといって、控えめにならないように」といったかなり大胆な内容のものまである。「淫らな風刺の版画」は、マリーノのコレクションの特徴ともなっている（ただし残念ながらほとんどが現存しない）。さらに申請者が強調するところによると、実際には所有していない作品や架空の絵画をもあえて『ガレリア』に記述・挿入することで、マリーノのこのテキストは、詩人の想像力と創造性とが発揮された空想のギャラリーとしての性格をも発揮することになるという。この点も本論文のきわめて独創的な指摘として高く評価できるものである。

最後に、第5章で論じられているマリーノの葬儀に関連して、ナポリの古文書館レアル・モンテ・マンソ・ディ・スカラ文書館所蔵の一次資料（AMMS-An11）を発掘して、それを新たに書き起こすとともに日本語に翻訳して論文に掲載した点があげられる。この資料の存在は専門家のあいだで知られてはいたが、本国イタリアでもこれまで内容が公にされることはなかった。申請者がはじめて本論文で公開したものである。六葉からなるその文書には、マリーノ晩年の「介護と葬儀の費用」、遺体の「防腐処理」、「葬儀」の仔細、「請求書」等が記載されており、一次資料としての価値がきわめて大きいものである。

以上のように本論文は、バロック期の美術と文学とを横断しながら、その時代に特有の美意識を独自の観点から豊かに浮かび上がらせるものである。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成27年6月21日、論文内容とそれに関連する事項について試問をおこなった結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 年 月 日以降